

令和5年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
43	川崎市立今井小学校	今野 忠

学校教育目標	今年度の重点目標
自ら学び、心豊かにたくましく 生きていく児童の育成をめざして －やさしく たのしく たくましく－	○確かな学力ときめ細かな指導 ○豊かな心と思いやり ○健やかな体 ○安全・地域

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策	
① 確かな学力と きめ細かな指導	○基礎・基本的な内容の確実な定着	学習指導要領に則り、育成を目指す資質・能力を明確にし、学習のゴールについて見通しを示すとともに習得した知識及び技能を活用して課題解決を図り、話し合ったり発表したりする活動を取り入れ、多様な考えができる児童の育成を図る。各教科の中で基礎・基本的な学習の定着を一層図りながら、児童自らが主体的に考え、判断し、表現できる力や、各教科を通して「目指す子ども像」を見据えた資質・能力を育てていきたい。	各学年で基礎学力を固め、個に応じた指導ができていた。全国・川崎市の学力学習状況調査から見ると、本校はかなり高い水準に学力は達しているが、その知識を基に発展的に考えたり、判断したり、表現したする力は不十分である。	基礎学力の定着をていねいに指導し、各クラスで主体的な学習を意識し、人とかかわり課題解決していく学習の展開をしていきたい。各学年・各クラスで目指す子ども像を具体的に設定し、校内研究と合わせて取り組んでいきたい。
	○授業改善・かわさきGIGAスクール構想の充実	「令和の日本型学校教育」に基づいた「自立した学習者」を育て上げるために、「個別最適な学びと協働的な学び」の充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」を通じた授業改善の推進をしていく。授業づくりでは指導者がファシリテーターとなり、GIGA端末を有効活用したり児童同士の対話を通した学びを深めたりして児童とともに創り上げていきたい。指導者だけでなく、児童も課題までの道筋を自ら描くことができるような授業づくりをしていきたい。「かわさきGIGAスクール構想」には、本校の特性に合った活用方法を見直し、改善しChromebook (GIGA端末)の教育効果を高められるように研究を進めていく。	学力学習状況からも本校は学力が高いが、その力を応用したり他教科と結び付けたりして汎用的な力が弱いと感じる。個別最適な学びとしてGIGA端末の活用を進め、他者とかかわり合いながら協働的な学びとの一体化を目指した。本年度は意図的に校内研究にGIGA端末の活用を求め推進した。その結果、昨年度以上に先生方は積極的に授業にGIGA端末での活用を取り入れ、授業改善にも繋がっていた。その一方、情報モラルに今後、指導の必要性を感じている。	来年度以降も校内研究にGIGA端末の活用を取り入れ、さらなる授業改善に繋げていきたいと考えている。また子どもたちには今まで以上に各クラスでGIGA端末に係活動、クラブ活動、委員会活動、各教科での表現活動や体育・理科での動画撮影等に活用させていきたい。
	○読書活動の充実	人生を豊かにする読書に児童が慣れ親しむためにも、様々な機会をとらえて読書活動を支援するとともに、良い本と出あえる読書環境の充実を図る。読み聞かせによる本の楽しさを広げ、想像力豊かな児童を育てたい。また学校図書館の整備と活用、情報活用能力の育成もしていきたい。	本年度も各クラスで本に触れ合う時間を確保し、教育活動を進めていた。また図書ボランティアによる親しみを感じられる読書活動が子どもたちに人気があり、読書への興味関心を向上させている。	来年度も教育課程に読書の時間を確保し、子どもたちに本に触れ合ってもらいたいと考えている。そして教師自身も子どもと一緒に本を読み、読書の時間を共有してほしい。また、教師が読んだ本を子どもたちにお話したり、読み聞かせをしたりしてさらなる読書活動の充実を図りたい。
	○外国語を含めたコミュニケーション能力・言語活動の充実	児童のこれからの人生において必要なコミュニケーション能力の育成を学校生活全般で図るとともに、コミュニケーションを行うために不可欠な言語能力の向上を目指して支援をしていく。	授業の中でも対話的な学習活動を取り入れたり、児童指導においても人とかかわりをしてしたりして、コミュニケーション能力を高めるつつあると感じる。	コミュニケーション能力の低さにより、子どもたちは人間関係、特に友だちとの接し方で苦労しているところがある。そこで、朝の会でフリートーク活動をしたり、校内研究でコミュニケーション能力を高められる手立て等を模索していきたい。
	○一人の子も見捨てない教育実践と児童理解・支援の充実	一人ひとりの人権(LGBTQも含む)に配慮し、日ごろから様々な方法により(かわさき共生・共有プログラムによる効果測定等)児童理解を進め、子どもが安心して過ごすことができる学校を目指す。また、支援教育コーディネーターを中心として、全教職員が教育的ニーズに応じた支援・指導ができるような体制の充実にも力を注いでいく。児童の健やかな成長を常に基盤に据え、家族・地域社会・関係機関との密接な連携の基に、子どもの人権尊重と慎重な配慮で適切な指導に努める。	特別支援教育を含めた一人の子も見捨てない教育実践が浸透してきた。支援教育コーディネーターを中心とした支援教育会議では、各学年・学級での細かな情報共有や支援体制について進められることができた。また、外部機関との連携をとり、ケース会議での個に対応する支援の在り方等について充実した会議ももてた。	来年度も一人の子も見捨てない教育実践を取組んでいきたい。教職員一人一人が子どもを愛おしいと思う気持ちや教える楽しさなどを抱きながら指導できるような学校づくり(学校風土や研修企画実践)をしていきたい。そして教職員一人一人が人権意識を高め、子どもと家庭、地域と一緒に学校を創り上げるという意識をもたせたい。

② 豊かな心と思いやり

<p>○夢を育む教育活動の取組</p>	<p>児童や教職員がアイデアと工夫を生かしながら、学校全体や学年で、子どもが主役となり夢のある楽しい活動を推進する。そこには地域の特性や人材等を生かしたり、児童にとっての学びが「主体的・対話的で深い学び」になるような学習展開したりして工夫しながら進める。</p>	<p>夢を育む教育活動を実践するには、教職員の創意工夫と子どもたちからのアイデアから展開することを考えているが、ゴールが見えていない状況であったと思う。校長としては夢を育む教育活動を通して、子どもたちの主体性やコミュニケーション能力、表現力を身に着けたいと考えているが、教職員には漠然としていて抽象過ぎたと猛省している。しかし、各学年での横の繋がりでの実践は多く生まれていた。今後、1年生から6年生までの縦の繋がりを大切に活動実践をしていきたい。</p>	<p>夢を育む教育活動の実践には、子ども一人一人が主体的に学び続けることが必要である。教職員全員で子ども個々の「好きなこと」「熱中できること」などを伸ばし支援していくことが大切である。そこで来年度は「夢を育む教育プロジェクト」を考えている。3～6年(できれば全学年)で子どもが一人一研究を一年間かけて、学び続けることを提案したい。子どもが「好きなこと」「熱中できること」「興味・関心のあること」などをテーマにして、研究を進める。例えば「電車の歴史と未来の鉄道」「脱炭素と水素エンジン」「歴史上の人物」など課題設定から主体的に取り組み、学習協力者として地域や保護者も入れての新しい教育改革を考えている。先生たちも自分の得意分野を伝え、児童が相談できる体制作りをしてキャリア教育にもつなげたい。またコミュニティスクールのスタートにもなると考える。今後、教育課程にも位置付け、同じようなテーマ設定した児童には共同研究も可とする。また年度末に研究発表を行いたいと考えている。</p>
<p>○自己肯定感の育成と明るい挨拶の励行</p>	<p>様々な機会をとらえて児童の規範意識の向上に努め、児童の心に夢と希望があり続けるように支援・助言等を日常的に行う。全教職員で児童を信じ認め、励まして児童の自己肯定感を育成したり、自己有用感を高めたりしてよりよく生きようとする意欲を養う。明るい挨拶や今井帽の着用を励行する。特に挨拶には重点的に指導を継続していく。</p>	<p>子ども一人一人の自己肯定感を高めるために、教職員は子どもが主役の学校づくりを意識して研修や日々の授業を通して取組んでいたと思う。子どもたちは自分を大切に、人の役に立った経験を少しずつ重ねていったように感じる。最後まで諦めずに取り組む子が増え、友だちから感謝されることで自己有用感も育っていると感じる。また、昨年度よりも挨拶ができる子どもがとて増えた。</p>	<p>来年度以降も教職員には、子どもが主役の学校づくりを意識して指導してほしいと考えている。教職員がチームとなって、健やかな子どもを育てる取組みを進めてもらおう。そして、明るく気持ちの良い挨拶の励行と今井帽の着用を継続していきたい。</p>
<p>○道徳教育・心と命を育む教育実践の充実</p>	<p>豊かな人間性の育成は道徳教育にある。職員一人一人がその意識をもって道徳教育に当たり、児童の道徳的実践力を高める。 人との関わりを大切に授業実践や一人ひとりが輝く学校行事での活動等を通して、思いやりの心や感動する心の育成を図り、夢や希望をもって生きる、命のかけがえのなさを理解し、自他の心や命を大切にする児童を育む。</p>	<p>各クラスで毎週しっかりと道徳の時間を設定し、道徳教育をしている。先生方は日常的に道徳的実践力が育つように指導を繰り返していた。人とのかかわりを通した授業実践を心がけ、友だちの意見を聞いたり、自分の考えを構築したりする姿が見え始めている。思いやりのある子どもたちが育ってきているように感じる。中学年が中心であるが、命の授業を本年度も外部講師にお願いして充実した授業展開ができた。</p>	<p>人とのかかわりを大切にした授業実践と、「大谷グループ」などを活用した教材を生かした夢を語り合える授業を展開していきたい。また道徳授業の終末で先生の語りを内容の濃いものにしていくために、先生方には日々アンテナを高くし教材づくりに積極的に取組んでほしいと考えている。来年度も命の授業では、外部講師にお願いするだけでなく、常に命の大切さについて子どもたちに伝えていきたい。</p>
<p>○特別支援教育の充実</p>	<p>インクルーシブ教育を目指し、知的障害、自閉症・情緒障害、肢体不自由等の児童に対する理解を深め、学校としての全体的・総合的な支援体制をさらに充実させる。また、関係諸機関との連携を図り、担任や保護者からの教育相談をもとに必要に応じて会議を開き協議する。それらを日々の支援に生かすことを目指す。</p>	<p>全教職員がインクルーシブ教育を意識しながら、取り組んでいたと思う。各クラスで各担任が合理的配慮を行いながら授業を進めている段階である。また、児童支援コーディネーターや支援級の担任を中心に、保護者からの教育相談に真摯に取り組み、成果を上げていた。</p>	<p>本年度の実績を基にインクルーシブ教育推進に向けての課題を一つ一つ解決していけるように、全教職員で研修を積んでいきたい。併せて個に応じた合理的な配慮についてアイデアを出し、情報共有していきたい。</p>
<p>○基本的生活習慣の育成、確立</p>	<p>学校と家庭での連携をもとに、児童の基本的生活習慣のさらなる育成に努める。児童が日々の生活の中で、望ましい行動をとるように、継続していくように職員が意識をもって児童に接する。</p>	<p>子どもの教育にはとても関心の高い家庭が多いこともあり、基本的生活習慣は向上している。しかし一部の家庭では、家庭での諸事情のため望ましい行動がとれていない子どももいる。</p>	<p>難しい家庭もあるが学校としては、これからも根気強く家庭との連携を図っていき、場合によっては外部機関との連携を取りながら子どもとその家庭の支援に尽力していきたいと思う。</p>
<p>○体育学習等の充実による基礎体力の向上</p>	<p>子どもたちが自らの健康や体力に関心がもてるよう、発達の段階を考慮した体育学習や健康に関する指導を充実させる。また日常的に運動に親しむ機会の設定し児童の基礎体力の向上を図る。</p>	<p>本校では基礎体力に欠けている児童が多いと感じている。新体力テストの結果からも、運動に親しむ児童が少ないかと考えられる。骨折や捻挫、筋肉痛などの症状を訴える児童が多いと感じている。</p>	<p>来年度以降も継続して、基礎体力を養うために、キラキラタイムや運動に親しむ集会等を増やし、体力向上を目指したい。今後も体を動かす楽しさを味わわせ、スポーツ嫌いをなくすことで体力づくりにつなげていきたい。</p>

③ 健やか

④安全・地域	○健康・安全指導の充実と食育の実践	学校教育全般、健康安全指導を通して、自分の体は自分が作り守っていく意識と実践力を高めていく。 食育を通して児童の健康な体づくりへの取り組みとして、担任と栄養士(栄養教諭、学校栄養職員)による食育の実践をする。教職員で食物アレルギーの理解や日常の食生活の見直し、改善を呼びかける。また、朝会や学級活動等で食文化についても伝えていきたい。	食育では低学年を中心に「朝食の大切さ」や「いろいろ食べよう」等を伝えた。しかし、全学年に食育の授業を実施することはできなかった。朝会等で栄養士や校長から食育に関するお話を伝えたり、各クラスで学級指導したりすることができていた。	栄養士と担任が学習計画に則り、食育の授業を積極的に進めていけるようにしていきたい。また、4月当初に実施している「食物アレルギー」研修を年に数回実施し、安全指導を充実させたい。併せて、先生たちには栄養士が中心となり、給食指導方法を学期ごとに研修していきたい。
	○防災教育等、安全教育の充実	防災組織や学校安全に係るマニュアルをさらに充実させる。総合的な防災・安全対策、危機管理への意識を高め、避難訓練等の実践を通してさらに安全を担保できる児童の育成を図る。	本年度は防災組織等の見直しをして、教職員一人一人の動きを明確にできた。避難訓練は計画的・意図的に進めることができ、子どもたちも危機意識をもちながら訓練に臨むことができていた。	本年度見直した防災組織を4月の最初に全職員で確認し、有事の際には的確に動ける準備していきたい。避難訓練は子どもたちに自分の命は自分が守る意識をもたせ、真剣に取り組ませたい。また、保護者と連携を取りながら今後の安全教育を推進させたい。
	○熱中症対策と環境の整備	過去の事故を忘れず児童の安全を確保し、学校や保護者・地域、川崎市に対する信頼感回復に努めていく。「熱中症から児童を守る」という決意をもって、熱中症を起こさない環境整備を整え、職員が団結して安全・安心な教育活動を展開していく。	熱中症対策を含め、子どもの命を守る取組をしてきた。本年度もWBGT28の基準値を全教職員に周知して徹底した。子どもの安全安心を第一に考えた教育活動が実践できた。	来年度以降も本校では、熱中症指数のWBGT28の基準値は遵守し、徹底した教育課程を創っていききたい。学校と保護者で熱中症対策の情報共有をして子どもの安全に努めていきたい。
	○学校webなどによる積極的な情報発信	学校web等を始めとする様々な媒体、機会をとらえて、児童の様子や学校教育の上で必要な情報をタイムリーに発信するとともに、情報受信をもとに必要な対策等を速やかに打つなどして、家庭・地域等との連携を図りながら安全・安心な学校教育を目指す。	ホームページやミマモルメ等の活用で、昨年度以上に学校の発信ができ、学校力を高める一助になっていた。また、保護者や地域と連携を取ることができ、多くの情報も得ることができた。	学校web等を積極的に活用し、今後も家庭と地域とも連携を取りながら、子どもの安全を第一に考えた学校教育づくりに努めていきたい。
	○保護者、地域との連携	日頃より児童に関する情報等を保護者、地域と必要に応じてやり取りするなどして、児童を学校・家庭・地域の3者で共通理解のもと、見守り育てていくようにする。	子どもの安全を第一に考え、地域・保護者との連携を密にして安全教育ができつつある。	保護者・地域・学校の三者で情報共有をして子どもの安全を見守っていく。そのためには三者が話し合える時間の確保を作っていきたい。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
○GIGA端末の本年度の活用報告と来年度以降の活動予定 ○コロナ後の学習と生活について ○児童の放課後の遊びについて(危険な遊び等) ○学校評価アンケートから見える道徳の学習状況について ○校庭開放プロジェクトについて	一人の子も見捨てない、夢を育む教育活動にするために ①主体的な児童を育成するために、来年度は夢プロジェクトに取り組む ②挨拶の励行を継続して行う。 ③GIGA端末の活用とICT授業における年間指導計画の見直し ④児童にとっての安全で安心な学校づくり ⑤保護者・地域・学校の連携